

落日——とかく家族は

sample

故郷とは出発の地。齡としを重ねるにしたがつて
世界はますます見慣れぬものに、死者と生者の描く型パターは
ますます複雑になる。

エリオット

第一章

一

祖母はしばらく殺虫剤の「ジクロロボス」の瓶を両手でひねくり回していた。白湯を飲むように飲んでしまったかったのだ。だが、何度かこころみたまもの、そのつど瓶を口元から遠ざけた。

チアオチアオ 嬌は曾孫になる女の子だ。彼女は祖母の近くで人形やクマのぬいぐるみと遊ぶのに忙しい。人形に注射を打ったり、ご飯を与えたり、おしっこをさせたり。祖母は曾孫があれこれと動き回るのをじつと見つめていた。

祖母は考えた。飲み込んで何も起きなければ、どうしようか。今どきは、毒薬も含めて偽ものが珍しくはないが、祖母の胃腸はこれまた他の人とは違うのだ。七十四歳の今まで、腹痛でトイレに駆け込んだという記憶はない。一度実家で有毒のサカナを食べたことがあったが、おなじものを食べた人がほとんど皆青い顔をして腹をこわし病院に送られ点滴を受けたのに、祖母だけは何も変わ

らず、顔はてかてかと輝いていた。こうした体験から、祖母はこの「ジクロールボス」は胃腸を壊すことになるとはあまり思っていなかった。

嬌嬌が祖母のシャツを引つ張つて言った。

「おばあちゃん、その瓶をちょうだい。お人形さんが飲みたいって」

祖母は曾孫に言いよかせた。

「ダメよ。これはね、遊ぶもんじゃやないのよ。幼い命は死んじゃつたら、誰も弁償できないでしょ」

言い終わると、祖母はしばし思いあぐね、ついに顔をもたげて手にした「ジクロールボス」をゆつくりと飲み込んだ。

祖母は飲み終わると、やや甘さがあると舌を鳴らした。偽ものじゃないだろうねえ。祖母はぶつぶつとつぶやいた。

秋が近づき、夜間の風が戸口近くの梧桐を撫で、サササと葉音が鳴った。世界はこのサササによって、静寂を感じる。祖母は静かにベッドに腰掛けていた。嬌嬌が祖母の足元にうずくまり、祖母の靴のバックルをいじっている。祖母はたまたまその小さな手が汚れていることに気づいた。立ち上がって洗面器に水を入れ、嬌嬌をあやして洗面器まで連れて行って手を洗わせた。ちょうどドアを開けて洗面器の水をサツと打ち撒いたとき、祖母は胃がいくらか痛むのを感じた。あの殺虫剤は偽ものではなかった。胃腸も他の人とあまり変わらないのだ。嬌嬌が手を叩きながら、祖母の聞

いたことのない歌を歌っていた。嬌嬌の天真爛漫な様子を見て、祖母はいくぶん心を動かされ、その後でいささか悔やんだ。隣室から息子のゴーガーという軒いびきが、薄壁を通って祖母の狭い部屋に伝わってきた。嬌嬌はククツと笑った。

「ねえ、おばあちゃん。おじいちゃんが呼んでいる」

祖母はフンと鼻を鳴らした。この出来そこないの息子は、たつた今夕食を食べるとき、ああだうだと母親に文句を言っていたのに、今はもう何もなかったかのように軒をかいている。明日になって、お前の気持ちはどうだか、みてやろう。明日ということに思いが及ぶと、祖母はいくらか心が和んで、思わず気分も晴れやかになった。口元を歪めてニタツと笑った。

だが、その時胃の痛みはさらに激しくなった。全身の筋肉が手で掻き回され、からみつかれているような感じなのだ。孫の成成チヨンチヨンとその嫁の漢琴ハンサンはダンスホールに行つたまま、まだ戻らない。祖母はときばきと嬌嬌の上着を脱がせてダブルベッドの上に運んだ。

嬌嬌が言った。「おばあちゃん、くさい」

祖母の口からでる菜の匂いとその小さな鼻を刺激し、嬌嬌は鼻をひくつかせた。祖母は笑いながら曾孫の鼻を摘んだ。

「いい子だね、嬌嬌は。寝なさい。お婆ちゃんの話の話を聞くかい？」

「聞く」

嬌嬌が寝かかると、祖母は自分の体重を支えきれなくなった。よろめくように自分のシングル

ベッドに戻り、身を横たえ、黒っぽいシーツをかけた。目を閉じると、すぐ眼前にぎらぎらした一面の赤がわき出てきた。晴れた日の朝焼けのような赤が、ゆっくりと広がった。その光景はどこかで目にしたことがあると思つた。それはどこであつたか、生まれてからのことを思い起こしたが、昔のことは赤に染められてぼやけてしまうのだった。息子の軀が、広がった赤にいつの間にか入り交じり、祖母の脳裏で波打つた。心臓が思わずドキドキと鳴つた。思いもかけず、息子を捨てて立ち去ることを思うと息子に憐れみの情がわいた。五十年ものあいだ、祖母はずつとその両腕で丁家の屋台骨を支えてきたと思つている。祖母は今まで、息子たちを裏切つたことはない。息子たちも彼女の目の届かぬところに行つたことはなかった。だが、彼女は今大手を振つてこの世界から立ち去ろうとしているのだ。息子の如虎ウーフと如龍ウーロンが目に涙をためているのが見え、ブタが締められるときの鳴き叫ぶ声を聞くような気がした。祖母はまた後悔し始めた。何もこうまでしなくてもいいのではないか。どんなに喚いても、結局は彼らは自分の息子たちだ。いつだつてわたしを母さんと呼び、つまりはわたしが彼らを今あるように育て上げたのだ。祖母はここまで考えると、思わず軽く溜め息をついた。

成成は民衆楽園（武漢にある有名な大衆娯楽場）を出るや、ぞくつと身震いした。漢琴が彼の背後について歩いてた。

「どうしたの？ ユーレイでも見たの？」

漢琴はそう言うと、彼女も身震いした。一陣の風が二人の頭上をかすめていった。

成成が答えた。「本当にユーレイを見たぜ」

「驚かさないでよ。あたし、夜に悪い夢をみるから」

成成は相手にせず、さっと自転車に乗った。漢琴も小走りに急ぎ、スカートを翻して自転車の荷台に飛び乗った。

「本当よ。何度も悪い夢をみたのよ。ユーレイがまつすぐあたしに向かってやって来たの。粗い息で鼻を鳴らしてね。怖くて腰が抜けたわ。目が覚めてみると、なんとお婆さんが軒をかいてるの」

成成は相手になるのも面倒で、ただ自転車をこいだ。お前のそのたちの悪い口なら、どんな亡霊だって夢に出てくるわけないぜ。おれが亡霊なら、ブタの夢にできることはあつても、お前のごとは行かないぜ。

成成と漢琴は民衆楽園の雲鶴ダンスホールから出てきたところだった。ホールは豪華ではなかったが、賑やかな六渡橋に近く、そのため特に人気があつた。成成と漢琴は、よくダンスをしに行つた。二人が知り合つたのも、そのホールだった。成成は造船工場のアーク溶接工で、漢琴は礪口の理髪店で働いていた。成成が先輩の加林とダンスホールに行つたときだった。彼らには踊る相手がなく、相手のいない女の子を物色した。加林が先に一人の女性に声をかけて踊つた。その女性は、一緒に来たという女性を成成に紹介してくれた。それが漢琴だった。その日の漢琴は、ことのほかきれいに化粧をしていた。黒く長い髪は頭の上で一輪の花のように巻かれ、身体にびったりした極

細ワールの半袖ブラウスが胸のふくらみを際立たせ、両腕も輝くように見せていた。深紅のブラウスは燃えるように赤く、大きな格子模様のラシャのスカートにハイヒールだった。成成はその日、漢琴にすつかりまいってしまった。何回か一緒に踊ったあとは、仙女と踊ったような感覚にとらわれた。漢琴のステップは軽やかで、ウエストはあくまで細く軟らかだった。成成がぼんやりと見つめていると、漢琴は口元をすぼめて微笑みかけ、ときおり流し目を送った。成成はその時十八歳で、女性と親しく付き合つたことはなく、ダンスの相手はいつも男だった。一番多く踊つたのは、妹の秀秀^{シヨウシユウ}だが、彼女はまだ十五歳で本当の生娘だった。漢琴はすでに十九歳の立派な娘で、女として膨らむべきところは十分に膨らんだ身体つきだ。成成はその女を前にして、それまで感じたことのない疼きを感じた。それはすつかり熟れた果実を目にして、なんとしても採って食べたいという疼きだった。その日から、成成はネズミを追いかけるイヌのように漢琴を追いかけた。成成には男として有利な条件があつた。つまり、背は一七八センチ、容貌も男らしかった。その上、国営工場の正式労働者だから、仕事も聞こえがよい。知り合つた当初、漢琴は成成を避けていた。漢琴には、やはり理髪師をしている七歳年上のボーイフレンドがいたのだ。彼女は長いあいだ成成を避けながら、二人を天秤にかけていた。そして最後に成成に決めたのだ。一方、成成は初めて会つたときの漢琴の美しさにまいって追いかけまわし、ついに手に入れたあとで、初めて漢琴の本当の姿を知つた。また漢琴より七歳上の男がなぜ憤慨しながら譲つたのかも分かつた。

深夜になつていた。涼しい風は、いくらか寒さを感じさせた。漢琴は半透明のシフォンのワン

ピースを着ていた。月の光は淡く、街灯の光も弱かったが、漢琴のブラジャーとショーツは透けて見えた。ショーツは柄付で、風が吹くとその都度道行く人の目を奪った。女は男の視線を引きつけるものだ。漢琴はそう思っていた。バストとヒップは人の注目を集めるポイントだ。漢琴は寒くならもう着ていられないころになって、ようやくシフォンのワンピースを秋の装いに着替えた。半透明のシフォンを作り出した人は、実に男と女の気持ちがあ分かっている人だ。女は思う存分身体を見せても風邪を引くことはなく、男は心ゆくまで女を眺めても悪いことにはならない。漢琴はそんなふうに考えていた。

仕事が終わると、いつも漢琴はシフォンのスカートを穿いた。裏通りのあちこちで涼をとっている人びとの近くを通り過ぎるとき、自慢のバストが多く視線を集めていると感じることができた。そうした視線は、何ものにも換えがたい快感だった。

祖母が一度叱ったことがあった。祖母は足を踏みならして言った。

「それでも我が家の嫁かい？　まるで昔の花柳界の娼婦みたいじゃないか」
もちろん漢琴はお返しをした。

「あたしが娼婦なら、あなたのお孫さんはそのお客さん、あなたはそのお客さんのお婆さん。みんな同じ穴のムジナってことですね」

祖母はやりこめられて、ただ足でどんどんと床を踏みならすしかなかった。

民衆菜園から自宅まで自転車です少少の道のりだ。銅人像（武漢の江漢区にある孫中山の銅像）を迂回して四官（ペーキング）

殿テイエン（埠頭のあ
る地名）

まで、まっすぐ進んだ。埠頭のライトが明るく輝いている。一艘のフェリーがやって来た。下船する客は昼間の客の十分の一にも満たない。人々は網の目のように張り巡らされた都会の道の中に素早く散って行く。フェリーの汽笛が静かに鳴った。寒風が吹き過ぎた。漢琴は両腕を抱えながら、甘い声で言った。

「成成、急いでほしいの」

成成は苦笑した。角を曲がればすぐ家の入口が見えるのだ。成成はわざと速度を落とした。お前の甘えた声を聞くくらいなら、お前が店で客とやり合っているのを聞く方がまだ。彼は実際漢琴が言い争っている場面を見たことがあった。その時は鳥肌がたつ思いだった。両の眉を釣り上げ、薄い唇で、結婚前だったが、とてもきれいな女性とは思えなかった。漢琴は美容の腕がうまくないためよく客から文句を言われ、自分のプライドをまもうとしてすぐ強く反撃にでた。その反撃の炎はしばしば単なるやりとりよりずっと凄まじい。そうしたことが重なって、漢琴の口の悪さは出来上がっていった。成成がそのことに気づいたとき、漢琴はすでに身籠もっていた。成成は仕方なく漢琴を娶った。そうでなければ、と成成は思った。こんな女とはどうあつても一緒にはならなかっただろう。

漢琴は家の入口で自転車からおりた。成成が鍵を採りだしてドアを開けると、漢琴が言った。

「成成、急いでよ。風邪をひきそうだよ。あたしがくしゃみをしたら、あなた、今晚はあなたの好きなアレは諦めてね！」

成成はその甘えた声を聞いてむず痒かった。

「お前、普通の言い方はできないのか？ そんな言い方、お婆さんに聞かれたら、街の娼婦がやって来てると思われるぞ」

成成はドアを開けると部屋の中がどこか変なことに気づいた。彼はまた思わず寒気で身震いし、電氣をつけた。

漢琴がダブルベッドに行き、嬌嬌を撫でた。嬌嬌はすやすやと、幸せそうに寝ている。漢琴が言った。

「あら、お婆さんはまた嬌嬌を入浴させていないわ。あの婆さんめ！」

成成はクンクンとおいを嗅いだ。

「漢琴、部屋の中、なんか変だぞ。お前、嗅いでみるよ」

漢琴は口を尖らせた。

「あなたの身体の匂いのほか、何もあるわけないわよ」

「違う」

成成はそう言うと、足早に祖母のシングルベッドに近づいた。祖母の靴の近くにある瓶を目にして、思わずドキッとした。彼はとつさに祖母のシーツをはらった。祖母の口からは白いあぶくが吐き出ている。その顔付きは落ち着いており、あたかも何かの思い出の中に浸っているようだった。祖母のこのような顔は滅多に見ないものだ。成成はびくつきながら祖母の顔に近づいた。彼は突然

驚いて叫んだ。

「お婆さん、葉飲んでる」

漢琴はすでにワンピースを脱ぎ、ブラジャーとショーツだけになって姿見の前で両腕を高くかかげ、脇の下に西施蘭（シイラン）（体臭消し）の美容液（ビューティシアン）を塗っていた。成成の叫びを聞くと、振り向きもせず面倒くさそうに言った。

「こんな夜中に何を叫んでるのよ？ 葉を飲むのが、そんなに驚くことなの？」

成成は彼女の言葉を聞かず、ドアから飛び出た。隣の家を力一杯たたき、続けざまに叫んだ。

「父さーん！ 父さーん！」

二

丁如虎の軒は、ゴーガーとひどく大きかった。隣人たちはその軒を聞くと、丁さんは何の心配事もなくゆつたりと日々を送っているに違いない、と噂した。そうでなければ、隣の部屋まで聞こえるような軒をかくわけがないというのである。丁如虎はそんな話を耳にすると、いつも一人悪態をついた。ばっか野郎めが。

「父さーん」と叫ぶ成成の大声で、丁如虎の軒が止まった。軒をかきながら見ていた夢は消しとび、夢の中で浸っていた幸せな世界も同時に消えてなくなった。彼は身を起こし、よだれを拭きな

がら靴をひっかけてドアを開け、荒々しく怒鳴った。

「誰か死んだんか？ そんな大声をだしおって！」

成成は顔に恐怖の表情を浮かべて父親をながめ、その余りの怒鳴り声に呆然としてしまった。しばらく黙ったあと、ようやく口を開いた。

「ばあ、お婆さんが、殺虫剤を飲んじゃった！」

その言葉に丁如虎は夢から完全に覚め、成成をむんずと掴んだ。成成のナイロン製のシャツにビリと線が入った。丁如虎が言った。「何だと？」

成成が繰り返した。「お婆さんが、殺虫剤を飲んじゃった！」

丁如虎の耳に今度ははつきり聞こえた。思いもかけず足から力が抜けた。母さんよ、なんでそんなことをやったんだ？ これからはもう、あなたに恩返しはできなくなってしまうたのか。

丁如虎は成成の後について靴をひっかけたまま、そそくさと成成の部屋に入った。漢琴が義父を見て金切り声をあげた。その時は柄物のショーツも身につけていなかった。彼女はおり悪く鏡に向かい、太ももの内側に皮膚病の葉を塗っているところだったのだ。その金切り声を聞いたあと、丁如虎は急に視界が白い霧に覆われているような感じがした。しばしばんやりした後、今度は突然緊張した。成成が祖母のベッドのわきで大声で叫んでいる。

「お婆さーん！ お婆さあーん！」

丁如虎は白い霧にお構いなくまっすぐに母親のもとに駆け寄り、手のひらで母親の呼吸を確かめた。

「急げ、成成！^{チエンチエン} 建建を起こせ。病院まで担ぐんだ」

丁如虎と二人の息子は祖母を乗せた板を担いで寝静まった大通りを走った。建建は十五歳になつたばかりでまだ中学生だ。兄の成成と二人で板の片方を担ぎ、父親が一人でもう一方を担いだ。

深夜の大通りは一人も通らずひっそりと静まり返っていた。街灯は薄暗かった。その薄暗さの中で月の光がかえつて明るく感じられる。丁如虎は飛ぶように急いだ。息子たちのハアハアという息遣いが聞こえてきた。頭の中には言いようのない思いが渦巻いていた。父親が亡くなつてから寡婦を守り通した母の年月を、ひそかに数えていたのだ。まるまる五十年。数え終わると、ますますいたたまれない思いにとられるのだった。

実際のところ、二人の息子は母親に対して、それなりに尽くしていた。動物を飼うように親を籠の中に閉じこめている人間に比べれば、丁如虎と丁如龍の兄弟はじつによくできていた。少なくとも祖母は、食や衣を心配せずに長男と暮らしてきた。次男は毎月二十元を母親に渡していた。退職金もなく自分の部屋もない祖母のような老人を、世の中のほとんどの子供たちは一人の人間とみなさないものだ。食べ残しの料理を与え、しばしの間でも生かしておけばそれでいいのだ。だが、丁如虎は少なくとも母親を自分より上位においていた。かれはいつも母親に孫たちと一緒に食事をとらせ、さらに孫たちには祖母の皿に料理を運ぶよう口やかましく言っていた。祖母は大食家で、食べ始めるとズーズー食べる音が十メートル先からでも聞こえた。一心にダイエットをしている漢琴

と秀秀とは全く違つていた。祖母の一回の食事の量は二人の一日分だった。丁如虎は祖母の食欲を快く思つていなかったが、彼は何も言わなかった。生活がどうすることも出来ないほど困窮しているわけではないのだから、祖母には好きなだけ食べさせようと思つていた。丁如虎の家は十二平米の小屋だけだが、祖母と三人の子供がいた。妻は早くに亡くなったが、かれにとつて面倒が減つたともいえた。彼の一家は長年その狭い部屋で暮らした。その部屋は長く続く平屋建ての長屋の一番端にある一間だ。丁如虎にとつて、一番端の部屋ということがおおいに助かった。秀秀が初潮をむかえ、胸もふくらみ始めて女らしさが出てきたころ、丁如虎は男と女が一つの部屋にいるのはよくないと思つた。そこで彼は、人を介して鋼材と石綿スレートを手に入れ、成成たち息子に建築工事現場からこつそりとレンガをもつてこさせた。そして、三日間の休みをとつて部屋の後に約八平米の小さな部屋を建てた。丁如虎はその小屋屋をとても気に入つた。彼にとつては、宮殿よりも輝いてみえた。小屋屋の内壁は白紙をのり付けし、秀秀が映画スターの写真をべたべたと貼つた。秀秀もその小屋屋が大いに気に入り、いつも内部をきれいに掃除していた。客が来ると丁如虎はその小屋屋に招き入れたがつた。小屋屋はさながら彼の自慢のタネとなつた。長屋に住んでいる人たちは、この小屋屋をうらやましがつた。五人家族で二十平米、男と女が一室ずつというのは、人口密度が高い漢口では、かなり恵まれていたといえた。

だが、丁如虎は息子の成成が日に日に成長するのを看過していた。息子がさかりのついたイヌのようにある女を追いかけているのも気づかなかつた。女を手に入れれば結婚だ。結婚に先ず必要な

のは、家である。成成の結婚話は、丁如虎の知らない間に進んでいた。成成は漢琴のお腹に子供ができてから、初めて父親に打ち明けた。その話を打ち明ける前までは、丁如虎にとって成成はまだずっとガキだった。そのとき成成は十九歳で、漢琴は二十歳だった。成成が父親に言った。本当は漢琴に墮ろせと言ったんだけど、漢琴は嫌だって言うんだ。あなたは子供を作るたしかな腕前があったのだから、これからは私と子供の二人を養っていかねばならないわよ、ってね。二人が話し合っているうちに四ヶ月が経過し、漢琴のお腹は誰が見ても分かるほどになった。成成はそこで白旗をあげたのだ。事の次第を知らされたとき、丁如虎は息子をマジマジとみつめた。その視線は息子の顔から下半身に移った。成成はいくらか顔をあからめ、手で覆った。丁如虎は何やら言いたげだったが、何も言わなかった。

それからは、丁如虎は息子の成成のために一心に結婚の準備をした。祖母と秀秀を追い出して、お気に入りの小部屋を成成の新居にした。十六歳の秀秀はまた男の部屋に戻り、父親と十三歳の弟の建建と同じ部屋で暮らすことになった。丁如虎は娘のために、カーテンをかけた。だが、秀秀はどうあっても祖母と同じベッドで寝るのは嫌だといつてきかなかつた。祖母は腹を立て、怒って下の息子の如龍の家に移った。如龍の家は武昌ウイチュンにあり、二部屋と狭い半間の居間まがあった。祖母は気ままにその居間に住んだ。これは、もつとも現実的といえた。口うるさい新妻も満足だった。だが、一ヶ月も経たないうちに、祖母はフェリーに乗って四官殿に戻って来た。初めのうちは風水が良くない、話し相手がいらないなどと言っていたが、ついには下の息子の嫁を口汚く罵った。祖母

は言った。死んでもあのずるがしこい嫁とは同じ屋根の下で暮らしたくない。丁如虎は母親を受け入れるしかなかった。戻ってきた祖母は、どうしてもあの小部屋に戻りたいと言い張った。あの小部屋は元々、あたしのために建てたのだ。丁如虎は仕方なく成成と相談し、成成は漢琴の意見を求めた。三人は何時間もあれこれ考え、漢琴は部屋の一角を祖母に使わせてシングルベッドを置くことによりやく同意した。その部屋の角にあったソファを居間の屋根裏部屋に移した。漢琴は考えた。数ヶ月たつて子供が生まれたら祖母に面倒を見させ、自分は以前と同じようにダンスなどが楽しめるだろう。気持ちもきつと落ち着くにちがいない。初めのうちは、夜、裸になって夜の愉しみを行っていると、祖母がかたわらから見ているのではないかと気が気ではなかった。だが、そのうちに慣れていった。たまたま祖母と視線があつたりすると、祖母は冷淡な目で一言、「バイト」と言った。だが、漢琴は全く気にするふうもなく、機嫌のいいときには一言加えた。「あなたも、やりたいの？」

祖母を救急治療室に送った後で、丁如虎はぐつたりと廊下の長椅子に座り込んだ。ほとんど一歩も動けなかった。彼は力なく成成に向かって手をあげた。

「叔父さんに電話しろ。お婆さんが薬を飲んだことは言うな。何かの病気にするんだ」
すでに夜半どきだった。建建は続けてあくびをし、成成が出て行くのを見ると慌てた。

「父さん、ぼく明日は学校があるんだ。ぼくも行くよ」

「ああ、行きな。帰って義姉さんにな、あす朝早く交替に来るように、言うんだぞ」

成成が言った。「あすだつて？ もう今日だよ。とつくに今日になつてゐる」

成成と建建は足早に階段から消えた。丁如虎はぼんやりと天井を見つめた。廊下は静まりかえつてゐる。救急治療室に置かれた機器の音と、当直の医師と看護師の低い話し声が聞こえていた。丁如虎はふと、やるせない思いがした。ちゃんとした暮らしをさせてるのに、母さんはこれ以上になが不満なんだ？

全ての救急処置が行われた。祖母は息絶え絶えとなつて、臨江病院の入院棟の廊下に横たわつていた。病人の割には病床が少なすぎて、廊下はさながら客船の板寝床のように病人でいっぱいになつていた。祖母の横たわつてゐるのは、ちょうどガンを患つていた年寄りが亡くなつて空いた場所だつた。

祖母の意識がかすかに戻つてきたころ、外はすでに白み始めていた。祖母は起きてストーブに火をいれなければと思つた。粥を温め、おかずを買い、成成を起こして勤めに行かせ、建建を学校に出し、嬌嬌にミルクを与え……。これらは毎朝祖母がやつてゐることだつた。まず薪を割り、引火しやすい石炭に火を点けてコンロに火を入れる。その後でコメをとき、粥を温める。竹籠を提げておかずを買いに通りに行く。近所にはたくさんの簡単な食べ物屋があつた。麵窩（ミユクワ）中央を薄くしてコムギが朝食に食べる、揚げパン、焼きそば、焼梅包子（シヤオメイバオ）武漢特産の、米粳粳（ミイバイ）米を原料にし、豆皮（トウヂ）糯米とタマゴを主原料にした甘

い菓、^{フーミイヂョウ}糊米酒（片栗粉と甘酒から作る）
子（た甘い糊状の食べ物）

物から帰ると、子供と孫を次々に起こした。そんなときは、「どうたら坊主」とか、「ブタになるよ」とか、絶えずブツブツと口にした。その後、部屋の入口に小さなテーブルを設える。子と孫たちがあくびをしたり腰を伸ばしたりしながら共同洗面場に行つて歯を磨き、一団となつてテーブルを囲みがつがつと食べるのを、祖母は満足げに見ている。彼らは、行つてきます、と声をかけ、それぞれ仕事や学校に行くのだ。祖母はそうした日々が気に入つていた。どんなに忙しく疲れても、構わない。こうしたことこそが、祖母であることの誇りなのだ。

祖母はなんとか懸命に起きようとした。だが全く身体を動かせない。祖母は太つているので、身体が動かせないほど太つてしまったのかと疑つてみた。成成に助けを求めようとも思つた。成成のダブルベッドは一メートルしか離れていない。何かがあるとしても祖母はベッドから一声成成を呼ぶ。成成は祖母の一番可愛がつている孫だった。成成は初孫で、世の祖母は初孫をことのほか可愛がるものだ。だが、それだけではなく、成成は人付き合いがよく、話し方も穏やかだった。成成を呼ぶことがこれほど力があるとは思いつかなかつた。

祖母は思はず何かが起きたのかも知れないということに思い至つた。考えているうちに、おぼろげながら、ぼんやりした赤を思い出した。きつとまだ夢の中にいるのだ。夢はまだ終わっていない。祖母は気を取り直し、あたかもまた夢の中に入つていくように静かに身を横たえた。